

南琉球宮古語多良間仲筋方言における「複合アクセント法則」の再検討*

セリック・ケナン†

概要

本発表では、南琉球宮古語多良間仲筋方言（以下、多良間方言）の複合語アクセントを取り上げ、この方言について想定されている「複合アクセント法則」を再検討する。先行研究では、多良間方言について、いわゆる「複合アクセント法則」が成立するとされてきた。すなわち2つの語根から構成される複合語においては、前部要素のアクセントのみが実現し、後部要素のアクセントは削除される。しかし、新しい調査の結果、この法則に従わない複合語が観察されることが明らかになった。本発表では、これらの複合語の一部を詳細に分析した結果を提示し、一部の複合語について複合アクセント法則が適用されないことを示す。なお、複合アクセント法則が適用されないパターンの方が歴史的に古いことを論じ、多良間方言における複合アクセント法則についてその成立過程に関する仮説を提示する。

1 はじめに

沖縄県宮古諸島多良間島で話され、南琉球宮古語に属する多良間方言について、いわゆる「複合アクセント法則」が成立していると主張されてきた(松森 2014)(五十嵐 2015)。この法則によると、複合語において前部要素のアクセント型のみが実現するのに対し、後部要素のアクセント型が削除され、実現しない。しかし、発表者が行った新しい調査の結果、この法則に従わない複合語が観察されることが明らかになっており、これらの「例外」をどのように位置付けるべきかという問題が生じている。

多良間方言について想定されている複合アクセント法則がどの程度適用されているかを検証するために、渡久山・セリック(2020)に含まれるアクセントデータを用いて、2つの語根から成る複合語を対象に分析を行った。その結果、1部の複合語において複合アクセント法則が適用されず、それぞれの構成要素のアクセント型実現することが分かった。なお、このパターンの方が歴史的に古いことを論じ、複合アクセント法則の成立過程のシナリオを提案する。

2 多良間方言のアクセント体系

2.1 3種類のアクセント型とその実現

多良間方言は3種類のアクセント型が区別される。この3種類のアクセント型(a型、b型、c型)は低音調が結びついている拍(以下「低核」)の有無とその位置によって対立している(青井 2019)。なお、低核の位置を正しく記述するために(1)に定義を示す「韻律語」という韻律的単位を導入する必要がある(五十嵐 2015, 2016)。

(1) 韻律語の定義：「2モーラ以上の語根や接語」

韻律語の単位を用いると各アクセント型を次のような記述することができる。すなわち、a型は無核で、b型

* 本研究は JSPS 科研費 19K13174 と国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」(代表: 木部暢子教授)の助成を受けたものです。

† 国立国語研究所、kcelik@ninjal.jp

は2番目の韻律語の末尾拍に、c型は1番目の韻律語の末尾拍に低核が指定される(表1)。それぞれのアクセント型の実現例を(2)に示す¹。

表1 多良間方言のアクセント体系

アクセント型	音韻的解釈
a型	無核
b型	2番目の韻律語の末尾拍に低音調の指定有り
c型	1番目の韻律語の末尾拍に低音調の指定有り

- (2) a. a型 (juda)=(mai) (ne:n) 「葉もない」
 b. b型 (jadu)=(ma]i) (ne:n) 「戸もない」
 c. c型 (ma]du)=(mai) (ne:n) 「暇もない」
 (青井 2016:69 より、表記・名称一部改変)

なお、多良間方言における低核はその直前に起きるピッチの下降、または、その直後に起きるピッチの上昇によって顕在化する。有核の韻律句(1つのアクセント型が実現する範囲)においてどのパターン(下降・上昇)が観察されるかは主に先行する韻律句の末尾拍の音調による(発話頭の環境は除く)。具体的に言うと、先行する韻律句において低核による低音調が実現し、末尾拍まで拡張するのであれば、後続する韻律句がその低音調を引き継ぎ、後続の韻律句において低核によって指定される低音調がOCP(Obligatory Contour Principle)の原理によって削除される。その結果、次の拍から高音調が現れるため、ピッチの上昇が観察される(詳細な分析は青井(2019)を参照されたい)。なお、発話頭における韻律句はデフォルトの高音調から始まる。従って、c型のanna「母」を含む韻律句のアクセントは、発話頭の環境ではピッチの下降によって、有核の韻律句に後続する環境ではピッチの上昇によって実現する(3)。

- (3) a. ピッチの下降: {(an]na^c)=(mai)} ... 「母も...」
 b. ピッチの上昇: {(u]ja^c)=(mai)} {(anna^c)=(mai)} ... 「父も母も...」

2.2 複合アクセント法則と問題の所在

多良間方言について、いわゆる「複合アクセント法則」(上野 2012)が成立しているとされてきた(松森 2014)(五十嵐 2015)。この法則によると、2つの語根から構成される複合語において、前部要素のアクセント型が実現するのに対して、後部要素のアクセント型が削除され、実現しない。言い換えると、複合語を含む文節では、1つだけの韻律句が形成されており、そして、形成された韻律句に現れるピッチパターンは複合語の前部要素のアクセント型による(表2)。

しかし、発表者が行った新しい調査の結果(渡久山・セリック(2020)に収録)、複合アクセント法則に従わない複合語が観察されることが明らかになった。以下の(4)に挙げる複合語は前部要素のアクセント型だけで説明できないピッチパターンを示している。(4a)においては、前部要素が無核のa型に属しているのにも関わらず、2番目の韻律語の末尾拍にピッチの下降によって顕在化する低核が現れている。さらに、(4b,c)の複合語はこれまでの先行研究で指摘のなかったピッチパターンを示している。すなわち、1番目の韻律語の末尾拍にピッチの下降によって顕在化する低核に加えて、2番目の韻律語の末尾拍にもピッチの上昇によって顕在化する低核が現れている。これらの複合語は2つの低核を持っていると解釈しなければならないわけだが、この

¹ 本稿の例では、下線を引いた太字が低核、「-」が接辞境界、「=」が接語境界、「()」が韻律語の境界、「{ }」が韻律句の境界、「]」「[」がそれぞれピッチの下降・上昇を表わす。

表2 多良間方言における複合アクセント法則（五十嵐 2015:13-14 より、表記一部改変）

前部要素	後部要素	複合語	例
a 型	a 型	a 型	{(katç <u>u</u> : ^a) + (mç <u>u</u> ^a) = (mai)} ... 「鯉味噌も...」
a 型	b 型	a 型	{(kuba ^a) + (gi: ^b) = (mai)} ... 「クバの木も...」
a 型	c 型	a 型	{(midzɨ ^a) + (kami ^c) = (mai)} ... 「水甕も...」
b 型	a 型	b 型	{(sɨma ^b) + (m]ç <u>u</u> ^a) = (mai)} ... 「島味噌も...」
b 型	b 型	b 型	{(mami ^b) + (gi: ₂ ^b) = (mai)} ... 「豆の木も...」
b 型	c 型	b 型	{(mim ^b) + (ga]m <u>i</u> ^c) = (mai)} ... 「耳甕も...」
c 型	a 型	c 型	{(wa] ₂ ^c) + (mç <u>u</u> ^a) = (mai)} ... 「豚味噌も...」
c 型	b 型	c 型	{(ada] <u>n</u> ^c) + (gi: ^b) = (mai)} ...
c 型	c 型	c 型	{(upu]ç <u>u</u> ^c) + (gami) = (mai)} ... 「海水用の甕も...」

特徴は前部要素のアクセント型だけでは説明が付かない。

- (4) a. (ka:^a) + (u]ri^c) = (mai) ... 「井戸下りも...」
 b. (na]ka^c) + (tu]₂^c) = ([mai) ... 「仲取りも...」
 c. (a]u^b) + (patu^c) = ([mai) ... 「ずあかあおぼとも...」

(4a,b) の複合語については、前部要素に加えて後部要素のアクセント型も実現するという解釈が成り立っている。これらの複合語における後部要素は1番目の韻律語の末尾拍に低核が指定されるc型に属しているため、2番目の韻律語に現れる低核が後部要素のアクセント型の実現であると解釈できる。つまり、(4a,b) の複合語はアクセント的に2単位に分かれると見ることができる。しかし、これに対して(5c)の複合語については同じ説明を与えることができない。なぜならば、前部要素がb型に属しているのに、1番目の韻律語に低核が現れるからである。つまり、(5c)に観察される表層のピッチパターンは構成要素のアクセント型で説明できない。

複合アクセント法則に従わない例を見てきたが、このような「例外」は実際にどれくらいあるのか、また、どのような性質を持つのかなどが不明である。これまで「複合アクセント法則が成立する」と主張してきた研究はこの一般化をするに当たってどれくらい多くのデータを用いたかは明記していない。そのため、提示された一般化の妥当性については評価しづらい。逆に、2つの低核を持つ複合語を見逃すなど、十分なデータを検討しなかった可能性が高い。つまり、多良間方言について、複合語によって複合アクセント法則が適用されないという可能性が残されており、複合語アクセントの大量のデータに基づいた実証的な検討が必要である。

以下の節では、渡久山・セリック (2020) に含まれるアクセントデータを用いて多良間方言の複合語のアクセントを検討する。

3 データと方法

3.1 データ

本発表では、『南琉球宮古語多良間方言辞典』(渡久山・セリック 2020) に含まれるアクセントデータを用いる。この辞典は約15800語を収録しており、名詞、動詞、形容詞、擬態語のほとんど全ての項目に対して多良間仲筋方言の母語話者である第一著者(昭和11年生)のアクセントを記している。なお、辞典の編集の際にアクセント資料の収録とアクセント型の特定は第二著者、つまり発表者が行った。

辞典には数千もの複合語がされているため、複合アクセント法則を検討するに当たって十分なデータが得られると考えられる。ただ、本発表で全ての複合語を扱うことができないため、「名詞」に分類され、1番目の韻

律語の末尾拍に低核がある2つの語根から成る複合語に限定して検討を行った。

3.2 方法

『南琉球宮古語多良間方言辞典』の項目から「名詞」に分類され、アクセント情報が記され、一番目の韻律語にピッチの下降がある、4拍以上の項目を全て抽出した。次に、抽出した項目に対して、2つの語根から成る複合語であるかどうかを検討し、選定した。

なお、本研究の目的が複合語のピッチパターンと構成要素のアクセント型との関係を明らかにすることであるため、選定の際に次のものを対象から外した。すなわち、**a.** 語源不明、または不確かなもの、**b.** 借用語であるもの、**c.** 漢語を含むもの、**d.** 数詞語根を含むもの、**e.** 指示詞語根を含むもの、**f.** 1拍の語根を含むもの、**g.** 音韻的に融合しているもの、**h.** 指小辞 **-gama** を含むもの、を外した²。除外した理由は次の通りである。**a.** と **b.** については、構成要素のアクセント型が不明である。**c.** については、多良間方言において漢語がアクセント的に特殊な振る舞いをする事が確認されており、漢語を含む複合語のピッチパターンに影響が出る可能性がある。**d.** と **e.** については、数詞語根や指示詞語根はアクセント的に特殊な振る舞いをする可能性がある。**f.** については、1拍の語根を含む語を複合語として分析するべきかどうか不明である。**g.** については、音韻的な融合が一語化が進んでいることを示しており、そのため、複合語のアクセントが構成要素のアクセント型とは無関係になっている可能性がある。**f.** については、**-gama** が付与される名詞はすべてc型に転じることが知られており、**-gama** が付与された語根を含む複合語のアクセントもそれによって支配される可能性がある。

続いて、選定した複合語について、構成要素を特定し、それぞれの構成要素の品詞（名詞、動詞、形容詞）とアクセント型の情報を抽出した³。この際、構成要素のアクセント型の情報が欠如する複合語は対象から除外した。このような方法を用いて、371項目が得られた。

4 結果

研究の対象となった複合語は2つの異なるピッチパターンを示している。1つ目は1番目の韻律語を形成する前部要素の末尾拍の前にピッチが下降するパターンである(5a)。このパターンを示す複合語は1番目の韻律語の末尾拍に低核がある。2つ目は1番目の韻律語を形成する前部要素の末尾拍の直前にピッチが下降した後、2番目の韻律語を形成する後部要素の末尾拍の直後にピッチが上昇するパターンである(5b)。これらの複合語は1番目と2番目の韻律語の末尾拍に位置する2つの低核を持っている。以下、1つの低核を持つ複合語を「タイプ1」、2つの低核を持つ複合語を「タイプ2」と呼ぶ。得られた結果を表3に示す（「形」「名」「動」はそれぞれ「形容詞」「名詞」「動詞」を表わす）。

- (5) a. タイプ1: (**ku**↓**i**) + (**gari**) = (**mai**) ... 「声嘎れも...」
b. タイプ2: (**nu**↓**ts**↓) + (**tu**↓) = ([**mai**] ... 「命取りも...」

5 議論

ここでは、語数が最も多い「形+名」、「名+名」、「動+名」の構成を持つ複合語を中心に論じる。

5.1 「形+名」と「名+名」の複合語

表3のデータからは、形容詞と名詞、または、名詞と名詞から構成される複合語について、複合アクセント法則がおおむね成立していることが言える。具体的に言うと、この2種の複合語の大半（228語中に206語、約

² それぞれ例を挙げる。a. **pa: + tsɯkɯ** 「十二月」、**pa:** は不明。b. **wari + ai** 「割合」。c.d.e.f.g.h.

³ 正確に言うと動詞の転生名詞と動作主の接辞 **-a** を含むものを「動詞」に分類した。

表3 結果

タイプ (語数)	構成 (語数)	アクセント型 (語数)
タイプ1 (314 語)	形+名 (26 語)	c 型+ a 型 (7 語)
		c 型+ b 型 (12 語)
		c 型+ c 型 (7 語)
	形+動 (1 語)	c 型+ a 型 (1 語)
	名+名 (185 語)	a 型+ a 型 (1 語)
		a 型+ b 型 (2 語)
		b 型+ a 型 (2 語)
		c 型+ a 型 (49 語)
		c 型+ b 型 (62 語)
		c 型+ c 型 (69 語)
	名+動 (97 語)	a 型+ a 型 (2 語)
		b 型+ a 型 (1 語)
		c 型+ a 型 (38 語)
		c 型+ c 型 (56 語)
動+名 (2 語)	a 型+ c 型 (1 語)	
	c 型+ a 型 (1 語)	
動+動 (3 語)	c 型+ a 型 (2 語)	
	c 型+ c 型 (1 語)	
タイプ2 (57 語)	形+名 (4 語)	a 型+ a 型 (1 語)
		b 型+ b 型 (1 語)
		b 型+ c 型 (2 語)
	名+形 (1 語)	a 型+ a 型 (1 語)
	名+名 (13 語)	a 型+ c 型 (3 語)
		b 型+ a 型 (1 語)
		c 型+ a 型 (3 語)
		c 型+ c 型 (6 語)
	名+動 (36 語)	c 型+ c 型 (36 語)
	動+名 (1 語)	c 型+ a 型 (1 語)
動+動 (2 語)	a 型+ c 型 (1 語)	
	c 型+ a 型 (1 語)	

90.4%) は前部要素が c 型であるタイプ1 に属しており、複合アクセント法則で予測されるパターンを示している。

ただし、複合アクセント法則に従わない残りの複合語を検討すると、幾つかの共通点が見出される。第一に、地名や動物を表わす複合語がよく見られる (6)(7)。第二に、「父母」のように構成要素の意味が素修飾・被修飾の関係ではなく、並置の関係にある複合語が見られる (8)。このデータから判断すれば、複合アクセント法則は、複合語全体の意味が構成要素の意味から得られ、構成要素のそれぞれの意味が修飾・被修飾の関係にある複合語を中心に適用されるという一般化が成立する可能性があると考えられる。

(6) 地名 : $aga]^{a} + baru^{c} = [mai \dots$ 「地名も...」、 $ni]s_{1}^{a} + baru^{c} = [mai \dots$ 「地名も...」、

na]ka^c + mma^c = [mai ... 「地名も...」

(7) 動物 : a]u^b + batu^c = [mai ... 「ずあかあおぼとも...」、a]u^b + mi^b = [mai ... 「さしばの若鶏も...」、
a]ka^a + pe^a = [mai ... 「ちょうげんぼうも...」

(8) 並置 : s]su^c + aka^a = [mai ... 「紅白も...」、mi]₂^b + biki^a 「雌雄も...」、u]ja^c + mma^c = [mai 「父母も...」

5.2 「名+動」の複合語

表3のデータからは、名詞と動詞（転成名詞）から構成される複合語について、複合アクセント法則が成立しているとは一概には言えない。この種類の複合語の数と後部要素のアクセント型別の分布を表4に掲げる。

表4 名詞と動詞から構成される複合語

タイプ	語数 (%)	内後部要素 a 型	内後部要素 c 型
タイプ1	97 (72.9%)	41	56
タイプ2	36 (27.1%)	0	36

名詞と動詞から構成される複合語の多くは前部要素がc型であり、タイプ1に属している。これらの複合語について複合アクセント法則が適用されていると言える。しかし、これに対して、27.1%もの複合語は前部要素がc型のタイプ2であり、これらを単なる「例外」として処理かどうかを検討する必要がある。

そこで、後部要素のアクセント型を見ると、はっきりとした傾向が現れる。つまり、名詞と動詞から構成され、2つの低核を持つタイプ2の複合語はもっぱら（前部要素がc型で）後部要素がc型に属する複合語である。逆に、前部要素がc型で、後部要素がa型の複合語の中に2つの低核を持つ複合語は1語も見出せない。このように、後部要素のアクセント型がタイプ2の所属条件となっているため、タイプ2に属する「名+動」の複合語において後部要素のアクセント型が実現していると解釈することができる(9)。つまり、これらの複合語は2単位に分かれる。そして、複合アクセント法則が適用される複合語の数(56語)に比べて、2単位に分かれる複合語の数(36語、40%弱)は決して少なくなく、そのため、タイプ2のこの種類の複合語を単なる「例外」として片付けることができない。

- (9) a. c型+c型（複合アクセント法則の適用有）：{(pu]ni^c) + (bu]^c) = (mai)} ... 「骨折も...」
b. c型+c型（複合アクセント法則の適用無）：{(na]ka^c)} + {(tu]^c) = ([mai)} ... 「仲取りも...」

さらに、a型が無核であるため、前部要素がc型、後部要素がa型のタイプ1の複合語は曖昧であり、複合アクセント法則が適用される解釈も、2単位に分かれる解釈も両方成り立っていることに注意されたい(10)。

- (10) c型+a型の表層形：a]tu^c + us]₁^a = mai ... 「後押しも...」
a. 解釈1（複合アクセント法則の適用有）：{(a]tu^c) + (us]₁^a) = (mai)}
b. 解釈2（複合アクセント法則の適用無）：{(a]tu^c)} + {(us]₁^a) = (mai)}

以上のことから、名詞・動詞の複合語について、形容詞・名詞や名詞・名詞の複合語と異なり、複合アクセント法則の適用度が低いと結論付けることができる。多良間方言の複合語のピッチパターンを正しく予測するために、構成要素の品詞という変数を導入する必要がある。

複合アクセント法則の適用に構成要素の品詞が関わる理由については次のように考えることができる。つまり、形容詞・名詞や名詞・名詞の複合語は構成要素の意味が修飾・被修飾の関係にあることが多い。これに対して、名詞と動詞から構成される複合語は構成要素の意味が項・述語の関係にある。構成要素のこのような意味関係の違いによって複合アクセント法則の適用度の違いを説明できる可能性がある。

6 通時論

前節では、複合アクセント法則が適用されず、それぞれの構成要素のアクセント型が実現する複合語が存在することを見た。しかし、実は状況がもう少し複雑である。渡久山・セリック (2020) のアクセントデータでは、2つのピッチパターンが許容される複合語が数百も収録されている。つまり、複合語によっては、複合アクセント法則が適用されるパターンと後部要素のアクセント型が実現するパターンが両方とも許容される (11)(12)。名詞と名詞から構成される複合語においてもこの現象が確認できているが、多くの場合は前部要素が a 型、後部要素が c 型である。

(11) $\{(\text{nu})\underline{\text{ts}}_1^c + (\text{idi}) = (\text{mai})\} \sim \{(\text{nu})\underline{\text{ts}}_1\} + \{(\text{idi}) = ([\text{mai}])\} \dots$ 「命拾いも...」

(12) $\{(\text{kani}^a) + (\text{maka})^c = (\text{mai})\} \sim \{(\text{kani}^a)\} + \{(\text{maka})^c = (\text{mai})\} \dots$ 「金属製のお椀も...」

共時体系において2つの形式の「揺れ」が観察されると、片一方が古く、片一方が新しいと解釈できる場合が多い。多良間方言の複合語のピッチパターンについても同様で、片一方のパターンが古いと考えることができる。そこで、1単位から2単位へという変化よりは2単位から1単位へという変化の方が自然であると考えられるため、複合アクセント法則が適用されない、2単位に分かれるパターンの方が古いと見ることができる。多良間方言の先史のある時代において複合アクセント法則が成立していなかったと仮定できるわけであり、このため、この法則がどのようにして生まれたかを説明する必要が生じる。

ここでは、複合アクセント法則が一部の複合語においてまず生じ、段階的に拡張していったシナリオを提案する。その背景に次の2点が重要な意味を持つと考えられる。第一に、構成要素のアクセント型の一部の組み合わせの場合 (a 型 + a 型、b 型 + a 型、b 型 + c 型、c 型 + a 型) は複合語のピッチパターンがそもそも曖昧であり、複合アクセント法則が適用される解釈とされない解釈が可能である。第二に、2番目の韻律語に低核が指定される b 型は多くの環境⁴において低核が実現しない。

最初の段階において、後部要素が b 型の複合語 (a 型 + b 型、b 型 + b 型、c 型 + b 型) において、後部要素のアクセント型が実現しない環境が多く、どの環境でも実現しなくなった。その結果、「前部要素のアクセントのみが実現する」というルールが生じ、ピッチパターンが曖昧である複合語 (a 型 + a 型、b 型 + a 型、b 型 + c 型、c 型 + a 型) についても、ピッチパターンの再解釈を経てこのルールが適用された。最後に、残りの複合語 (a 型 + c 型、c 型 + c 型) にも複合アクセント法則が適用されるようになったが、古いパターンが完全に消えず、複合語によっては、生き残った。なお、名詞と名詞、形容詞と名詞から構成される複合語の方がいち早く複合アクセント法則が適用されたことも考えられる。

7 おわりに

本発表では、多良間方言の一部の複合語において、先行研究で想定されてきた「複合アクセント法則」が適用されないことを示した。なお、共時態系における複合語のピッチパターンの揺れに着目して、多良間方言における複合アクセント法則がどのようにして生じたかについて論じた。

参考文献

- 青井隼人 (2016). 「南琉球宮古多良間方言の三型アクセント—その特徴と型の中和一」 『音声研究』, **20** (3), 66–80.
青井隼人 (2019). 「南琉球宮古多良間方言の欠性的低音調」 『音韻研究』 (22), 3–10.
五十嵐陽介 (2015). 「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」 『比較日本文化学研究』 (8), 1–42.
五十嵐陽介 (2016). 「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」 『言語研究』 (150), 33–57.
上野善道 (2012). 「N 型アクセントとは何か」 『音声研究』, **16** (1), 44–62.
セリック・ケナン (2020). 「南琉球宮古語水納島方言のアクセント体系と基礎語彙」 『琉球の方言』, **45**, 243–281.
渡久山春英・セリック・ケナン (2020). 『南琉球宮古語多良間方言辞典』 国立国語研究所.
松森晶子 (2014). 「多良間島のアクセント規則を再検討する」 『日本女子大学紀要 文学部』 (63), 13–36.

⁴ つまり、1つだけの韻律語から成る韻律句において b 型が実現できない。ちなみに、多良間方言において b 型が a 型に合流し始めていることが指摘されている (セリック 2020)。